

コラム44:同窓会 (2015.7.13)

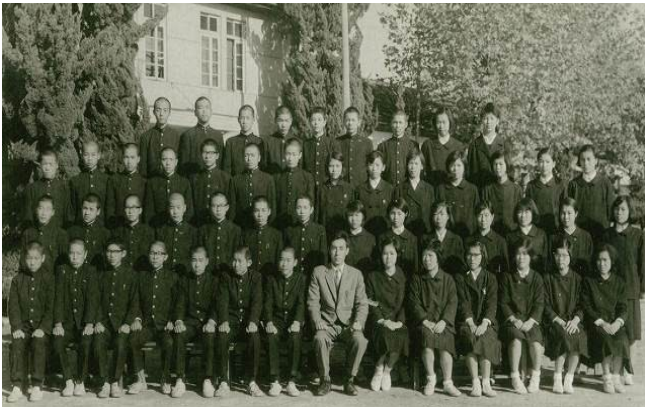
「昭和40年春、中学校を卒業して50年の歳月が流れました」という文面のハガキが舞い込んだ。本年4月春の盛りの頃のこと、同窓会の案内状であった。「50年の歳月」と一口に言うが、それは一人の人間の人生に値するほどの、途方もない時間の長さである。人が生まれ、学校を出て、会社に勤め、結婚し、子供が生まれ、さらにその子が成人して結婚して孫が生まれる……人生の中でそれくらいのことが出来る時間なのである。私は自分のこれまでの人生について考え、現在の自分の本当の姿を知るために出席することにした。

6月21日(日曜日)、その日がやってくるのは意外に早かった。梅雨の晴れ間の心地よい天気である。昼までの時間、私はトマトの支柱立てをしていた。何となく気持ちが落ち着かない。隣の田んぼで草取りをしているT氏に声をかける。「今日の同窓会どうするや？」彼は同じ中学の同級生である。「今日じゃったかいの。ワシは行かんよう」「ほうかい。ワシはちょっと顔を出して見るワイ」それ以上は聞かなかった。理由など聞く必要はなかったからである。出たい者は出て、出たくない者は出なきゃエエ。同窓会というのは、そんなものだと思うのだ。

＜同窓会 出るも出ないも 気分まかせ＞

妻の昼からの予定の都合もあり、車に便乗して早めに出る。最寄りの JR 駅から広島駅まで25分、そこから会場のホテルまで徒歩5分。私は駅前の本屋で時間をつぶすことにする。列車に乗って刻々と会場が近づいてゆくにつれ、私は自分の心が暗く沈んでゆくを感じた。楽しい会に出るはずなのにどうしてなのか？駅に早めに着き、予定通りの行動として、駅前のデパート内の大型書店に行く。その頃には、この漠然とした「憂鬱」の理由がわかりはじめていた。私は50年前の自分に「再会」したくないのである。同窓会に出て、あの頃の同級生に会うことは、私が嫌いな「昔の自分」に会うことなのだ。「50年前の自分と、今の私は違う人間。今までずいぶんいろんなことをしてきたじゃないか。だから気にしなくても大丈夫だよ」、そう自分に言い聞かせた。

＜五十年 前の自分に 会う怖さ＞



会場のホテルに着くと、入り口で二人の「女の子」が迎えてくれた。一人は同じクラスのEさん。「ちいと早かったかのう」「そんなことはないよ。もうみんな2階へ上がってよ」少し気分が明るくなる。2階に上がると、ロビーの椅子は満席状態。受付の方へ向かう私に、後ろから名前を呼ぶ者がいた。「元気かいの！」振り向くと、席に座った4人の男が私の方を向いている。みんな見知らぬ顔であった。「ゴメン！ようワカラんわい」思わずわけのわからぬ返事をして、そのまま受付へ。会費を払い、出席者名簿と名札を受け取る。「女の子は旧姓で書いとるよ」この名札が大切であることは後でわかるのだ。そして小箱の中に手を入れてくじ引き。座席テーブルを決めるためのもの、これは私の会社時代によくあったやり方である。

＜同級生 いくつになっても 女の子＞

渡された当日の出席者名簿をみると、3名の先生も含めて58名。当時は一クラス50名以上おり、6クラスあったので約一クラス分の出席。そんなものかもしれない。司会の〈女の子〉により会は始まり、まずは幹事の挨拶、そのあとは先に逝った同級生たちに全員で黙とう。この年になると、私の担任のN先生をはじめ、かなりの人が鬼籍に入っているのである。つぎに来賓の先生の近況報告と、乾杯の音頭があり、そのあとは自由に話して食べて歓談、という流れで進行した。

くじで指定されたテーブルに座ると、何となく落ち着かない気分であった。右も左も知らないオジサンとオバサンである。私はこの気分のワルイ疎外感を、以前によく経験している。会社員時代に遠方の産地に行って懇親会に出ると、いつもこんな感じであった。これを打破するには自分から話すしかない。まずは名札を覗きこんで「名前は何？」、それで昔のイメージが少し浮かんで来たら大丈夫。今度はそれを目の前の顔と照合させてゆく。すると頭や顔の変化はあっても、50年前の姿と重なってくるのだ。「そういえば小学校は一緒だったよね」そこから会話が始まるのである。

＜同窓会 名札なしでは 話せない＞

話題にも気を使わなくてはいけない。この年になると、いろんな環境や状況の人がいる。聞かれないこと、話したくないことは、私自身を含め、誰もが持っている。家庭のことや、仕事のことは避けた方がよさそうである。なかには顔を見ても、名前を聞いても、何にも思い浮かばない人もいる。「ワシ覚えてる？」隣の席の「女の子」に聞いてみる。彼女はにこやかに首を振るのみ。「ワシもようわからんのんよ」さらに聞いてみると、私たちは中学二年の時に同じクラスとわかった。「それでも二人とも覚えてらんいうのは、ちいと寂しいよね」あとは中二の時に行った修学旅行の話で盛り上がる。もう大阪に30年住んでいるが、こっちに帰ると広島弁、大阪では関西弁になるという。そして野球の応援は、(阪神ではなく)「やっぱりカープファンじゃねえ」とのことでした。

＜おとなりの 見知らぬ人も 同級生＞

どんな人が同窓会に出席するのだろうか？まずは、そこそこに健康であることが第一条件であろう。そして家族の中に「介護者」などの問題がないことである。私自身は10年前には出たものの、5年前の同窓会には欠席している。会社は定年退職していたが、父が寝たきり状態で、転院をしなくてはならぬ状況であったため、そんな気分になれなかったのだ。出席するのは、現在の自分の生活と家族に大きな問題がなく、これまでの自分の人生を、「まずまずかな」と考えている人たちではないだろうか。



午後2時に始まった会は、クラスごとに出席者が前に出たの点呼や、卒業アルバムのスライドショーを間にはさんで、すでに2時間を過ぎていた。最後の締めくくりは、校歌の斉唱と全員での記念写真。前に一緒に並ぶと真ん中の先生と区別がつかない。私自身を含め、ほとんどが自分より若いと思っているのだろうが、みんな初老のオジサンとオバサンである。特に我々の中学入学の時に新任で入られたH先生などは、ほとんど同級生に見える。50年の歳月が、先生と生徒の年齢差を限りなく小さくしてしまったようである。4時半からはホテル内の別室に移動して二次会へ。ほとんどの者が参加したようだ。

＜同窓会 先生生徒が 同じ顔＞

隣の席の男が二人、自分の健康法について話している。「犬を連れて散歩しても、運動にならんわい。そう思わんかい？」私に話を振ってくる。知らない男だ。「そっち名前は？」「ワシはSよ」あざやかに記憶がよみがえってきた。彼と同じクラスになったことはないし、話をしたこともない。しかし、彼は非常に目立っていたからである。剣道部で県大会に優勝したというだけでなく、運動能力が抜群だったのだ。あの頃は、校内でテストがあると、上位50番位まで校内に張出をしていた。彼は「走る」「投げる」「飛ぶ」といった運動能力テストで、3年間一度も学年トップの座を譲ることがなかったほどの、スゴイ男だった。「走れば、陸上部より早いし、野球をやったらレギュラーのヤツよりうまかったよのう」ひとしきり自慢話を聞かされる。そういえば、隣の話相手のD氏は勉強面でトップクラス。同級生で唯一、私立の進学校に行ったはずである。彼は先ほどから、カラオケを歌って、やたらと踊り廻っている。50年の歳月は、「堅物の秀才」を「ひょうきんなオジサン」に変えてしまったようだ。しかし、そうは言ってもこの二人は分野は違っても、当時の我校の「ヒーロー」、目立つ存在であったことは間違いないのである。

<学園のヒーローたちも 好々爺>



今仮にタイムスリップして、あの頃の自分に戻れるとしたら、どうするか？14歳から15歳の頃の写真をみると、まだ思春期のあどけない表情である。しかし、私はあの頃の自分がどうしても好きになれない。D氏のように特別に成績がいいわけでもなければ、S氏のようにクラブで目だった活躍をしたわけでもない。人より秀でた能力があるわけでもないのに、自意識過剰で妙にプライドのみ高く、そのくせ消極的でおとなしく、地味で暗い性格、

という存在。こんなく男の子>を、クラスのく女の子>が覚えていないのは当然なのである。エネルギーが余ってワルになる、ということも出来なかったヤツであり、「不完全燃焼」の思春期だった、と今にして思う。決して「あの頃に戻りたい」などとは、私は思わないのだ。

<十五歳 笑顔の向こうで 何思う>

こんなサエナイく男の子>の私にも人並みに「初恋」があった。中学二年の時に同じクラスであったHさんであった。もちろん実際に付き合っていた、などということはあるはずもなく、ろくに話もできない、「子犬の恋」というヤツである。出席者名簿を見渡しても、名前は見当たらなかった。私は少しホッとしたのだ。もし目の前にいたら、どうするだろうか？他のく女の子>のように、飲み屋のママさんと話すような感じで、ペラペラ話せるだろうか？おそらく何もできないに違いない。気の弱いく14歳の男の子>の自分に返ってしまい、口もきけない状態になると思う。勇気を出して話しかけたら、「同じクラスじゃったかね。覚えとらんのんよ」などと言われたりして……



<初恋の 人に会いたし 会いたくもない>

二次会は4時半から始まり、6時を過ぎても終わる気配はなかった。カラオケが絶えることなく歌われ、各テーブルは話が尽きないようだ。私は今さらカラオケグループにも入れず、話も尽きて、居場所がなくなった自分を感じていた。ワンちゃんの散歩も気になる時間だった。世話をしてくれた同じクラスのY氏とEさんに一言ことわりを言って、退出した。



夕方とはいえ、空はまだ青かった。橋の上には心地よい風が流れていた。駅に向かって歩きつつ、

私は心が明るくなっているのを感じた。いつのまにか、同窓会に出る前の重い「憂鬱感」から解放され、足どりが軽くなっていた。

私は学生の頃に観た映画のことを思っていた。寺山修司(注1)の「田園に死す」(1974年)という作品である。冒頭にこんなシーンがあった。

墓地 子供たちがかくれんぼをしている。

おかっぱの髪の子が、正面を向いて目かくしをしながら、「もういいかい？」

子供たち、草深い墓地の中に隠れる。「まあだよ」

鬼の子、目かくししたまま、「もういいかい？」

誰も見えない墓地の卒塔婆や墓標のかげから、「もういいよ」

女の子が目かくしを取って振り向くと、大人になった子供たちがあらわれる。

郵便配達人、洋装の女、軍人、子を抱いた母、満州浪人。

「田園に死す」(寺山修司 著 フィルムアート社刊 1975年発行)より

あれから五十年、とてつもなく長い時が流れ、ずいぶんいろいろなことがあったようにも思う。しかし、過ぎ去った人生を今思うと、実に短く感じる。「コラム40:ネコの涙」では40年前の東京での「意識の中の時間」であった。今回は50年も昔のことになるのだが、現実には流れた時間と、人の心の中の意識の時間の大きなギャップを、やはり感じてしまう。半世紀にもなるナガーイ時の流れも、もしかしたら、「もういいかい」と「もういいよ」の間くらいではなかったのかと……

<五十年 過ぎてしまえば ほんのつかのま>



「この次の同窓会は5年後らしいが、どれだけのモンが来れるかのう。はいじゃが、おたがい元気であって、また会いたいもんよ」

(注1) 寺山修司(1935～1983)

青森県生まれ。歌人、劇作家、作詞家、小説家、映画監督として活躍。31歳の時に演劇実験室「天井桟敷」を設立。前衛的な作風で主に70年代の若者に影響を与えた。

「田園に死す」は自身の歌集をもとにした、自伝的色彩の濃い作品。子供時代と現在を同じ次元にダブらせながら、現実と幻想を織りまぜ、ひとりの少年の自己形成の過程を映像化した。

「ATG映画の全貌」(夏書館刊 1979年発行)より